

放射能汚染地域での活動を通じて

北島 理恵

【チェルノブイリ・アートプロジェクト（APCH） 代表】

◆ はじめに

2003年、当時22歳だった私は、海外留学と国内外での写真の個展活動を経て、自らの生き方を模索していた。そんな中、たまたま参加した講座で、偶然、ひとりの少女の写真に再会した。それは、チェルノブイリ原発事故の放射能による影響で命を落とした、ターニャという少女の姿だった。

7年前、中学時代にたった1度見た、8分間のテレビニュースで紹介された少女の名前や素性を記憶していた自分に驚いた。そして、次いで走馬灯のように、当時、新聞で被災地の子どものためのイベントのボランティアに参加したくて支援団体に緊張しながら電話したことを思い出した。



生徒たちと通訳と共に、左下が筆者

その講座の企画者がターニャを取材した人物であり、当時問い合わせた団体も、その方が設立したものだを知ったとき、意図せぬ出会いは、むしろ必然のように感じた。ターニャの命が7年という時を経て、私をチェルノブイリの地に導いてくれたのだと直感した。

その後、資金を貯め、2003年から現地でのボランティア活動を始めた。私が活動するのは、放射能高濃度汚染地域に住む子どもたちが、年に2回、3週間程度、健康のために保養する施設のひとつである。これまでに2回、計5ヶ月間ベラルーシに滞在し、延べ350人以上のチェルノブイリ被災者の子どもたちに、写真の撮り方を教える講座を開いてきた。

現地に行く前、チェルノブイリ原発事故については資料を通じ、自分の中にある程度固まったイメージをもっていった。そして、初めてベラルーシの地を踏み『被災者』と呼ばれる子どもたちを目にしたときも、その知識によるイメージの延長線上に彼らをみていた。

しかし、現地で寝食を共にしながら一人ひとりへの理解を深めていくと、日本では想像し得なかった側面が見えてきた。私が施設で出会う、放射能の影響で慢性的な身体症状を抱える子どもたち。彼らの意識は、健康について考えるよりも、貧しくて自宅で満足な食事をとれなかったり、両親がアルコール中毒者であったりと、日常で抱える別の問題の方に比重が置かれていた。私が全てだと思い込んでいた『放射能による健康被害』は、彼らにとっては、日常的に抱える問題のほんの一部でしかなかったのだ。

それから私は、講師として子どもたちに対して受身で接するだけでなく、彼らの日常に自分から更

に入り込む必要性を感じた。そして、施設で授業を受けもつ傍ら、放射能汚染地域に出向いて学校や孤児院などの訪問を重ねた。そしてなによりも、被災者の自宅に家族の一員として共に生活させてもらい、出来る限り子どもたちの日常生活に身を置き、そこから『チェルノブイリ』を視ることを重んじるようになった。

また、私は、被災地の中で生活することで、各施設のマネジャーとその下で働く人々や、学校の教師と生徒、視察先で見聞きしたこととそれに対する通訳の主観など、ひとつの事柄について、いろいろな人たちの視点を垣間見ることができる立場にある。一方で、日本人として、資料や国際世論などを通じ、チェルノブイリの現状に対して情報を収集することもできる。

政府関係者とつながりが深いかどうかや、海外のNGOとの関係の深さや、地域による情報量の差などさまざまな立場の違いによって、私のような『海外からの視察者』に見せたい側面が変わる。そういった背景を踏まえると、みえてくる新たな側面がいくつもある。

それら全てを経て、ようやくみえてきたのは、20年という年月が人々の感覚を麻痺させ、それがより多くの副次的な問題を生み出し続けている現状だった。

現地では、いつも悩み、答えを探している。泣くこともしょっちゅうだ。それでもまたベラルーシに帰りたいと思うのは、現地の素敵な家族、友人、生徒や先生たちのおかげだ。彼らとの出会いが、20年前にチェルノブイリという遠い国で起こった問題を、自分自身の大切な人が現在形で抱える問題そのものに変えてくれた。

ここに、一人ひとりとの出会いに心から感謝しつつ、現地で見たり考えたりしたことを、自由に書き連ねていこうと思う。

◆ 『チェルノブイリ被害』の拡がり

現地に行けば『チェルノブイリ』が分かると思っていた。しかし、現地に来て実情を知れば知るほど、いったい『チェルノブイリ』とはどこまでの範囲のことをいうのか、余計に分からなくなってくる。日本でイメージしていた事故の被害。それは、放射能による人体への影響のみだと考えていた。しかし、私が被災地での生活で目にしたのは、その生み出した『更なる被害』の数々だった。

1. 食文化

自然が身近にあるベラルーシの食文化は、魅力に満ち溢れている。森には、ベリー類などの果実やきのこなど自然の食材が豊富だ。また、地方に住む人々は畑を所有し、職場と自宅と畑を行き来し、ジャガイモをはじめ様々な種類の野菜を育てている。



納屋の様子。

左手前が瓶詰め、右手奥が大量のじゃがいも



ヴェトカ村の一家の食事風景

暖かい時期に収穫したそれらの一部は、厳しい寒さが続く冬に備え、ジャムやピクルスなど多様な調理法で瓶詰めにし、大量に納屋に蓄える。おいしいだけでなく、それぞれ栄養価も高く保存性に優れている。また、農家では、野菜のヘタや皮はとっておいて家畜の餌にしたり、種を暖炉で乾燥させスナックにしたりと、無駄にせず全てを使い切る。

また、ベリー類などの果実は、砂糖を入れて煮込み、コンポートと呼ばれる自家製のジュースをつくる。各家庭にオリジナルの味がある。私は「ベラルーシの食事でなにが一番好き？」と聞かれると、いつも「コンポート！」と答え笑われるのだが、次の瞬間には、どの家のお母さんも、大きな瓶をもってきて、何杯も何杯も注いでくれる。誰もが「我が家のコンポートが一番おいしい！」と誇らしげに笑う。

汚染のひどい農村地帯でも、多くの家庭で事故前と変わらない食文化が営まれている。森や畑の実りを受け、育み続けてきたベラルーシの食文化。そこに放射能が入り込んだ。土壌や水脈が汚染され、その地域で育った家畜や作物が被害を受ける。それらを摂取する人々の体内に、放射性物質が蓄積され、がんなどの遺伝子異常をもたらす。たった一回偶発的に起こった事故が、人々の育んできた伝統的な暮らしそのものを、自らの健康を損ね続ける要因に変えてしまったのだ。

2. 文化継承

農村地域では、木材の加工、農作物の育て方、森での食べられるきのこやフルーツの見分け方など、多くのことを子どもたちは大人から自然と学んでいく。家には、父と息子が一緒に作った棚やテーブルがあり、母と娘が抜群のコンビネーションで料理の支度をする。そういうふとしたところで、家族が共に時間を過ごすことを大切にしている様子が伝わってくる。

子どもたちと話をすると、地元への愛に満ちた言葉が溢れ出てくる。子どもたちはみなキラキラと目を輝かせながら、その理由を次から次へと並べてくれる。自分の育った村で子どもたちを育て、また、その子どもたちが次の世代の子どもたちを育てる。人々が代々守ってきた当たり前の暮らしの中に、伝統が自然と根付いている。

各地の学校を訪問している中でも、印象的だった場所がある。そのうちの 하나가、近隣の村がいくつも廃村と化した、ゴメリ州のヴェトカ村の学校だ。教室に入る前に、先生は言った。「原発事故が20年間でこの地域になにをもたらしたのか、次の瞬間には、あなたの目に映っていることでしょう」

校舎の電気が消えているのは、どの学校でも見慣れた光景だった。しかし、訪れた教室の中は、これ



空き家や廃屋が目立つヴェトカ村

までみたどの学校よりもがらんとした印象を受けた。教室の広さに対し、子どもの数が極端に少なかったからだ。私は、机と机の間を歩きながら、恥ずかしそうにしながらも好奇心を隠せない子どもたちの目を見ながら話しかけ、髪や肩に触れ、緊張を解いていった。

その、一人ひとりとの触れ合いから、気がついたこと。視点の定まらない子。言語障害のある子。落ち着かず、足をバタバタさせたり、手を動かしたりし続ける子。そういう子どもたちは、私が滞在する施設でもよく目にして

いた。しかし、その教室で私が一番気になったのは、皮膚が乾燥し、まるで老人のようなしわしわな顔で、恥ずかしそうにこちらを見つめる、優しそうな目をもった男の子だった。それは、同じ村の知的障害をもつ17歳の少女の顔つきとまったく重なってみえた。小さな村の中、同じ症状を抱える子どもが多かったのだ。



学校で出会った男の子（本文参照）

その教室を出た後の、先生の言葉。「あなたが今目にしたもの全てが、あの事故の産物であり、受け入れるしかない、ありのままの現実なのです。ほぼ全員の子どもたちが、体力がなく、風邪を引きやすくなりました。血液、甲状腺異常のほか、知的障害が目立ちます。以前は優秀な子どもたちをたくさん生み出す村として、私たちは誇りに思ったものでした。しかし、今では・・・5年前に、銀メダル^(※)をひとつあげたのが最後の記録だなんて。1888年に教会での学習からスタートし、100年以上の歴史があるこの学校は、私たちの誇りです。しかし、事故が起こってから、多くの村人がミンスクやゴメリに移住していきました。1985年から86年にかけて、800人いた生徒が、今は160人しかいないのです」。その一言ひとことが、重く響いた。

(※) ベラルーシの学校では、通知表で全教科が最良のAだと金メダル、それに近いと銀メダルが贈られる。

3. 漠とした被害

これまで当たり前にあったものたちが、事故の後、ふいに姿を変えた。自分の愛する地元から子どもが極端に減った。ある人は亡くなり、ある人は移住した。村を歩けば空き家が目立ち、かつてその家にいた友人たちを懐かしむようになった。体調を崩しがちになった。視力が落ちた。“がん”という言葉が頻繁に耳にするようになった。障害児が増えた... それらの全てを結び付けるキーワードが“放射能”という漠然とした恐怖なのだ。半永久的に続いていくその影響下において、人間がなにを失うのかを知るには、長い年月をかけて実情を把握し、検証していく姿勢が不可欠である。

「チェルノブイリの被害は収束に向かっている」、そう位置づける国際的な判断基準の多くは、健康被害の調査による数値によって示される。それも、限られた項目の中、一定の基準に基づいた数値でしかない。しかし、現実には人が健康を損ねるということは、目に見える命の数で示しきれないものではない。事故さえなければその命ひとつひとつが育むはずだったものが、本来あったはずだ。そういった、未来への可能性そのものも、削がれてしまった。被災者たちは、数値化されようがされまいが、現在形で多くのものを失い続けている。それが、村の人々の暮らしの中から感じた率直な感想だ。

◆ 20年経って、変化する問題の形

1. 放射能に無知な被災者

自覚症状のない人でも、被災地に住んでいる以上、放射能の影響を受け続けている。しかし彼らは、身体症状がある人たちのみを『放射能による影響を受けた被災者』と位置づけており、自らをその枠にまったく含んでいなかった。そのことに気がついたとき、遺伝子に影響を与え続けるのに実感でき

ないという放射能の特有の性質に、あらためて恐怖を覚えた。そして、より本質的に被災地の現状を理解するため、私は、自身を被災者だと認識していない人たちの話にも耳を傾けるよう心がけた。そして、みえてきたのは、被災者自身が、自らが抱えている問題の原因である放射能というものについて、事故後20年が経った今でも理解していないという現状だった。

いくつかの村で共通していたのは、数年前より、政府から水道の設置や下水道の水洗化などの生活改善の提案を受けたり、運動・文化施設の新設が開始されたことに対し、人々が復興の希望を見出していることだった。「近い将来、この地域はゾーン（高濃度放射能汚染地域）ではなくなり、私たちは事故を乗り越えられる」と言うが、彼らの言葉に放射能の性質を踏まえた、科学的根拠はなかった。

自らの問題であるにもかかわらず、なぜ被災者自身が、正しい情報を得ることができないのか。その背景には、政府関係外の新聞の廃刊など、政府のメディアコントロールがある上、更にインターネットなど個人で情報を入手する手段が乏しい現状などがある。

味があれば、においがすれば、人々は異変を感じるができる。しかし、放射能はそうのように五感で存在を察知できないため、「ある」と認識できる材料がない。そんな中、政策による生活改善という日常で変化を実感できるものから安心感を得ることで、人々は、放射能で汚染された村に以前のよりに多くの人々が戻ってくる希望につなげているのだ。

病院でも、驚くことがあった。レーツィツァの病院を視察したときのこと。私は、その地で45年以上も診察を続けているという村の院長と話をしていた。健康被害の現状を聞くと、確かに、放射能の食物汚染などの知識はあった。しかし、その院長の専門に骨も含まれていたもので、ストロンチウム90（半減期28年・骨に沈着する）の影響などに言及すると、意外な答えが返ってきた。「放射能に種類があるのですか？」

私は、放射能には種類があり、半減期や影響を与える箇所が異なることなどを説明すると、目を丸くしてこう言われた。「毎年、イギリスから放射能レベルをチェックしに来ている。しかし、詳しいデータは科学者たちの間で交わされているものなので私たちのもに届くことはない。放射能のどの種類が今、どの程度残っているのか、そんなこと私たちが知る由もない」。それが、人々が身体に異変を感じたときにまず訪れる病院の医師の言葉だった。

「村の医者には放射能に関する知識なんてない」と、村の人々は口々に言う。私の知人にも、事故直後から2001年までずっと村の病院で誤診を受け続けていた女性がいる。彼女の場合、疑問をぶつけ懇願し、紹介状を書いてもらいようやく設備の整った病院で診察を受けた。そこで初めて放射能との関連が認められ、ようやく正しい治療を受けることができた。私はとても驚いたが、彼女のような話は、めずらしい話ではないという。

事故後、20年という時を経て、補償が減り続ける中、人々が正しい診察を受け、安心して生活できる環境は未だ整っていない。また、自覚症状のない人たちは「自分に被害はなかった」と言い切り、異変を感じると突然、放射能に結びつけて考え出す。正しい知識が得られないことで、人々は『放射能』という漠然とした恐怖に翻弄されているように映った。

2. 危機意識の低下

・子どもたちの隠れた問題

子どもたちと接していて気にかかるのは、放射能に対する危機意識の低下である。原因の一つに、彼

らの中で『チェルノブイリ』への感覚が麻痺してしまったことが挙げられる。年に2回の汚染地域外での保養、学校での安全な食事の支給、施設などで受けるさまざまな検査。幼い頃からそれらを受け続け半ば習慣化されている。疑問に思わせてくれる人も環境もなく、「なぜそれらを受ける必要があるのか」を考える意識が弱くなってしまった。自分が生まれるずっと前に起こった事故への影響に対して実感できない中で、ただ放射能を意識し気を張り続けることは、難しい。

放射能汚染地域に住む子どもたちは、放射能による影響で生まれつき免疫力が低く、発がん率も高い。そんな中、私が危惧しているのは、子どもたちの隠れた飲酒や喫煙の問題だ。アルコール中毒はベラルーシの深刻な社会問題となっていて、中毒者の子どもは、意識せず幼い頃に危険性を認識しないまま、ウォッカを摂取し始めてしまうこともあるという。また、喫煙も法律で年齢規制があるが、必ずしも社会で機能していない。

・背景

飲酒や喫煙の悪循環を断ち切るには、自ら止める決断をさせるしかない。そのためには、子どもたち自身に放射能の影響についてきちんと理解させると共に、飲酒や喫煙がもたらす自らの健康へのリスクを理解させることが必要だ。子どもたちを守るのは、大人しかいない。子どもたちの成長を守るのは、その国の大人の務めだと私は考える。

しかし、被災地で私が目にしたのは、目を疑う光景だった。ヴェトカ村での視察滞在中、子どもたちに連れられて地元のディスコに行った。そこで、何人もの喫煙する子どもたちを見た。

ディスコに到着すると、昼間に通訳として視察に同行してくれた女性を見かけた。彼女は、日中は学校の英語教師であったが、夜に会った時は、ディスコの受付で、客である子どもたちから入場料を受け取るアルバイトをしていた。

「教師の仕事だけでは生活できない。この村に十分な他の仕事があるわけでもない」というの

が、彼女の意見だった。教師の給与は安くて大変だと聞いていたが、それでも私は、驚きを隠せなかった。



公民館に出来たダンスホール

ベラルーシで“ディスコ”というのは、商業施設としてのディスコその他、地元の公民館や体育館が休みの日にライトアップされ“ディスコ化”することも多い。ダンスが大好きなベラルーシ人にとってのディスコは、日本人がカラオケに行くような感覚に近い。

しかし、子どもたちにとってそこはアルコールや煙草、ドラッグへの入口となりやすい場所であることも事実だ。本来なら、大人の監視が行き届いているべきである。しかし、地元の警察官が見回りにきていたが、その先生や子どもたちと楽しそうに話をしただけで、特に喫煙をとがめることなく帰っていった。

同じようなことが、2006年の正月にもあった。私は施設で受けもった生徒の自宅に泊まっていた。深夜0時を過ぎ、パーティの後に向かったゴメリ市のレーニン広場。大きなクリスマスツリーがライトアップされ、ダンスミュージックがかかるその場所で、多くの子どもたちが飲酒・喫煙をし、その

横を何人もの警察官が素通りしているのを見た。子どもたちは警察官が通っても、特に酒や煙草を隠そうという素振りすらみせなかった。

外から支援を送り続けるだけでは、解決しない問題がある。子どもたちの健康のために、彼らを育てる家庭、学校、地域、社会が、彼らの置かれた状況を的確に把握し、正しい方向に導いてあげる必要がある。それは、現地の大人たちの務めであるはずだ。社会全体で子どもたちをみられるような方向に意識を転換させることが必要だと感じる。



ゴメリ市のレーニン広場

◆ 協働という発想へ

1. 根底にある姿勢

・『受身』の脱却

ベラルーシに移住して20年以上になるという女性から、さまざまなソ連時代の人々の生活についての話を聞いた。商店に普段並ばないオレンジなどの果物が届いたときには、氷点下20度以下の寒空の下、自分の子どもに食べさせてあげたいと、大勢の母親たちが長い列を作ったこと。大きな町に買い物に出るには、許可証申請が必要だったこと等。どのエピソードからも、抑圧感の中、与えられるものを待たざるを得ない市民の様子が伝わってきた。

その話は、過去のある出来事を思い出させた。

2003年、初めて放射能汚染地であるゴメリ市に出向いたときのこと。私は、被災地域に住む子どもの日常を誰よりも理解している被災地の大人から、学ぶ立場として足を運んだつもりだった。しかし、訪れた学校では、困窮の現状説明の後、支援を求められ、校長やマネージャーから頭を下げられた。

それまで、私は、さまざまなベラルーシ人と『友人』として対等に接するか、ロシア語ができない身として自分の母親の世代から子どものように世話を焼いてもらう立場にあった。だから、ベラルーシ人から頭を下げられるなんて、考えてもみなかった。

そこで初めて、私は『支援者』が被災者の目にどう映っているのかを知った。私は自分が、他国に支援するゆとりのある外国から来た人間として、とらえられていたことを感じた。戸惑いを隠せない中、彼らの話を聞いていると、「以前は支援があったからこれができたのに…」という声ばかりで、支援の呼びかけや健康への理解促進など、自らが自らのために行った話が一切ないことが気になり始めた。

『支援金』は、本来自らのために使えるはずのものを、あえて困っている人のために役立てたいという人々の思いから届けられている。その背景には、一人ひとりの労働や日々の節約など、見えない苦労がある。しかし、被災地域で受手からみる『支援金』は、ただ待っていれば届くもののような響きを含んでいた気がした。

そこで私は、自分がベラルーシにくるために、どれほど不眠不休で働き続けたかを言葉にした。そんなことは本来、口にすべきことではない。けれど、日本でお金を稼ぐことが楽だからとか、生活に余裕があるからだとか、そういうイメージを壊さなければ対話が始まらないと思った。

「支援を期待していたのならごめんなさい」と謝罪した上で、自分がそこを訪問した目的をあらためて説明した。「私とあなたたちは、生まれた国は違うけれど、この地域に住む子どもたちを守りたいという、同じ思いをもった同志だと思う。だから、今すぐ得られる目先の支援ではなく、長期的に子どもたちの未来を考えるための話し合いをしたい」。

本当の私をさらけ出すことが、支援を期待していた彼らを落胆させないか、不安だった。しかし、次の瞬間、ずっと硬かった表情が急に柔らかくなり、会話の節々で笑い声が発せられるようになった。そして私はようやく『支援者』という枠から外れ、一人の人間として出会い直すことができた。それが、共に考えるための対話を始めるきっかけにつながった。

この時の経験が、私の現地での活動姿勢の根底にある。

・20年後だからこそ

今でも、被災地の施設を訪問すると「以前は支援があったからこれができたのに…」という声を多く耳にする。もちろん、外からの長期的な支援は不可欠だ。しかし、一方で、現実問題として、事故後20年が経った今、これまでのようにただ待ち続けるだけでは、国際社会から支援が増えていくことは難しいだろう。その現状を、被災者自身がもっと理解することが必要だと私は考える。それはきっと、自らのために行動する意識をもつきっかけにつながると思うからだ。

彼ら自身が放射能の影響に関する正しい知識を得て、自らの健康を守るライフスタイルに変えていき、それを次世代を担う子どもたちに伝えていく。そんな風に、被災地の内部から直接的に、彼らの健康や生活を変えていくことは、外からの支援以上に大きな変化をもたらせる。そうやって、被災地の内部から変えていかれることが、まだまだあるはずだ。

2. 子どもたちの未来

ベラルーシがソ連から独立して15年。未だ十分な仕事がなく、失業率の高い現状が続いている。一方で、それを肌で感じながら育てている子どもたちには、新しい時代を担っていく、大きなパワーと可能性を感じずにはられない。

・学習意欲

子どもたちの学習意欲の高さは、特記に値する。例えば語学であれば、13歳くらいなら普通の日常英会話程度なら難なくこなせる子が何人もいる。16歳くらいになると、ネイティブ並の速度で話す子も少なくない。また、一つの言語だけでなく、フランス語やドイツ語など複数の言語を同時に習得している子どもも多い。

日本のように塾などに通うわけではなく、自宅で宿題や復習などを一生懸命頑張って



モギリョフ市の学校の授業の様子

いる。また、子どもたちだけでなく、先生たちの熱意も素晴らしい。ベラルーシの学校と子どもたちとの関係は密接で、日本人の私たちが学ぶべき素晴らしい要素を多くもっていると感じる。学校が定期的な家庭訪問や面談を通じて、子どもたち一人ひとりの状況をきちんと把握し、勉強だけでなくその成長過程において、責任をもって向き合っている姿勢には脱帽する。私はこれまで、家庭に問題を抱える何人もの子どもたちが、担任を母のように慕う姿を目にしてきた。

また、子どもたちのやる気を高める要素が、教育課程に上手に組み込まれている。高い成績を収めた生徒には金・銀などのメダルが贈られたり、地域ごとの予選を経て、全国の学校からの代表者が各科目のコンテストに参加したりする。それらは、子どもたちのやる気に上手に火をつける。

ベラルーシの社会の中で、明るい未来への芽は、着実に育ち始めている。

・人間性

私は、現地では月に計80人ほど、ふたつの種類の授業を受け持っている。ひとつは、15人程の長期の授業で、モデルやカメラマンとして基礎知識や技術を教えた後、小さなグループに分かれて作品を撮るグループ授業。

もうひとつは個人授業だ。英語からロシア語への通訳のつくグループ授業とは異なり、個人授業は、私と子どもたちだけで作り上げるプロジェクトだ。毎回、通訳兼アシスタントを数名つけるのだが、彼らの奮闘振りがすごい。

モデルの緊張をほぐす役、ライトや小道具などを担当する役、私の作業を助ける役。それぞれが役割分担をし、いつも私が必要な、その1歩先を読み取り、語学と共にサポートしてくれる。私の授業は、彼らなしでは決してできない。ベラルーシの子どもたちが、一生懸命で、まじめで、誠実で、責任感があり、優しさに満ち溢れていることを、私は彼らとの時間を通して知った。授業を一方的に教えるだけではみえてこない、一緒に頑張ったからこそみることのできた側面だ。そして私は、きっかけこそ与えれば子どもたちは大人が思い描くはるかに素晴らしいレベルまでやり遂げる力があるということを学んだ。



ゴメリ市の学校で、習ったばかりの歯磨きの大切さを私に得意そうに教えてくれた少女



生徒の作品

◆ おわりに

ベラルーシは、その発展途上で、放射能の影響という半永久的に続いていく問題を抱え込んだ。そのため、医療支援、里親制度など、海外からの長期的な支援は不可欠だ。

この仕事を始めて、日本でさまざまな分野でチェルノブイリについて活動されている方々と出会うことができた。この20年間、多くの人々の努力によって築き上げられた現地との支援ネットワークを知れば知るほど、自分の世代で支援を途切れさせるわけにはいかないと切に思う。

2006年、ベラルーシで写真展を開いたときの、子どもたちのはしゃいだ様子が目に浮かぶ。彼らは、今、自分たちの写真作品が日本の人たちの目に届くことを心待ちにしている。また、ベラルーシの学校の先生と生徒たちが楽しみにしていた、日本の学校の子どもたちとの文通も始まったばかりだ。日本に、チェルノブイリ被災地の子どもたちと出会う小さなきっかけを作り出していきたい。

被災地で活動すればするほど、政治的な問題をはじめ、さまざまな壁があるのが現実だ。その中で、少しでも被災者と共にできることはないかを探し続けている。日本にいても、日々、ベラルーシの友人や生徒たちからの手紙やメールを通じてパワーをもらう。現地で壁にぶつかり悩んだり泣いたりしたときも、幾度となく彼らに助けられてきた。これから先も、被災地と日本を行き来しながら、大好きな現地の人々と共に考え、歩んでいきたい。



ゴメリ市で再会した生徒たちと、友人である先生